

折口信夫「三郷巷談」の意趣

小川 直之

はじめに

折口信夫の民俗学への出発は、大正二年十二月発行の『郷土研究』第一巻第十号に発表した「三郷巷談」ということができ。『郷土研究』の表紙には本号要目として「三郷巷談」があげられているが、これは「資料及報告」欄に掲載された四頁余りの資料報告である。その後、大正三年三月の『郷土研究』第二巻第一号と、やや時を経て大正五年十月の『郷土研究』第四巻第七号に「三郷巷談」続編が掲載されている。さらに『郷土研究』休刊後は折口自らが主宰する大正七年八月創刊の『土俗と伝説』第一巻第一号、同年十月の第一巻第三号に、膝折武助の名で「三郷巷談」の続きを発表している。

折口信夫は、都合五回に亘って発表した「三郷巷談」を、当初どれ程の分量を考えて書き始めたのかは判らないが、ともかく柳田が編集を行っている『郷土研究』に、民俗学への道を歩

もうとする者として、これを発表することが目的だったと思われる。

本稿では、いわば折口信夫の民俗学への出発と位置づけることができる「三郷巷談」が、その後の折口信夫の学問形成にどのような意味をもつのか、また、「巷談」と名づけられたこの小品から読み取れる折口の視点が、現在の口承文芸研究にとってどのような可能性をもっているのかを検討してみたい。

「三郷巷談」の成立と柳田國男

「三郷巷談」は前述のように大正二年十二月から大正七年十月にかけて、五回にわたって発表されている。その後折口は、昭和五年六月刊の『古代研究』民俗学篇二に、二回目の連載である『郷土研究』第二巻第一号以降に発表した「三郷巷談」を、同名で収録している。折口は、「三郷巷談」の初回である『郷土研究』第一巻第十号発表分は『古代研究』民俗学篇二には収録

しなかったのである。

『古代研究』民俗学篇二への収録にあたっては、「一 もおずしやうじん」「二 あはしま」というように、それぞれの巷談に番号を付し、最後の「一五 らつばを羨む子ども」などには「土俗と伝説」発表時には巷談の小題も付けられていなかった。つまり、折口は、『古代研究』民俗学篇二には、巷談すべてに小題と番号を付けて収録したのである。

『古代研究』民俗学篇二に「三郷巷談」初回発表分が収録されていないことについては、この分には被差別集落のことが実地名入りで書かれていて、これに対する配慮があったのだろうと思う。大正十一年には被差別集落の解放運動を進める全国水平社が組織され、昭和初期にはその活動が展開しており、差別解放の意図があったのではなからうか。^①

折口信夫の年譜をたどりながら「三郷巷談」の成立を見ていくと、折口は明治四十三年七月に國學院大學学部国文科を卒業する。卒業後は大阪に戻り、病気の母親の付き添いなどをし、九月には関西同人根岸短歌会に出席し、初めて釋迢空の号を使い始める。一方柳田國男はこの年の五月には『石神問答』、六月には『遠野物語』を出版しており、出版後に折口はこれらを読んだようである。

戦後の昭和二十二年に柳田國男の学問について書いた「先生の学問」では、『石神問答』『遠野物語』を読み、それは文学でもない史学でもない、待ち望んでいた新しい学問との出会いで、

大きな驚きであったことを述懐している^②。海外の理論も取り入れた、これも新しい学問として、卒業論文の「言語情調論」を書きあげた二十三歳の折口は、柳田の『石神問答』や『遠野物語』に今までにない新たな学問の息吹を強く感じたのである。

大正二年三月に創刊された『郷土研究』は、新たな学問のための具体的な方法が示された新鋭の雑誌で、折口は「三郷巷談」を投稿する前に、前述したように柳田の『石神問答』『遠野物語』は読んでいた。「三郷巷談」の成立を考えるにあたっては、このことが前提となろう。

年譜では、明治四十三年七月に大阪に帰り、自らの学問の方向が定まらないなか、歌を詠み、翌明治四十四年十一月には大阪府立今宮中学校の嘱託教員となる。この年の十二月には東京人類学会に入会し、そして、大正元年八月十三日から二十五日にかけては、今宮中学校の生徒を連れて志摩・熊野への旅をし、帰阪後には一七七首の短歌を収めた歌稿「安乗帖」をつくっている。この歌稿は後の歌集『海やまのあひだ』につながるものだが、その翌年大正二年に、創刊された『郷土研究』に「三郷巷談」を投稿するのである。

「三郷巷談」は大阪で書いて『郷土研究』に投稿し、大正二年十二月の第一巻第十号に載り、大正三年三月の第二巻第一号に続編が掲載される。そして折口は、今宮中学校の教え子たちが三月に卒業すると、同校を退職して四月下旬に東京に出る。

東京に出てからは、國學院大學に設立されたばかりの、三矢

重松が幹事長を務める国文学会に参加するようになり、この年の冬には柳田の『遠野物語』を神田の露店で手に入れていた。この時の感動は昭和十四年一月の『ドルメン』第五卷第一号に「遠野物語」と題した長編の詩に詠んでいる。「大正の三とせの冬の 凧のふく日なりけむ。」で始まる詩で、この詩では「軒の端の 一つの店の、かんでも まだ照り出でず ふるぶれる 油煙の底の ほのかなる明りの照りに、我はもよ 見いでたりけり。これの世の珍宝 我が為の道別きのふみ。」「立ちながら読めり―幾枚。喜びは渦汐なして うつそみの 心ゆすりぬ。風の音の 遠野物語。」「物語書かし、大人のみ面すら いまだ知らず、おもかげに恋ひける時に、ゆくりなく我がえし み書、膝におき、つくゑに伏せて 歎息せしことぞ幾たび―。」「三分しんのらんぶ搔上げて、さ夜深く読み立つ声の わが声を 屢々ひそめ、若ければ、涙たりけり。遠野物語のうへに」などと、その時の感動をあらわにしている。『遠野物語』は折口にとって「我が為の道別きのふみ」だったのである。

大正三年には「髻籠の話」を『郷土研究』に投稿し、大正四年三月には國學院大學国文学会で「異郷意識の進展」を口頭発表する。『郷土研究』に投稿した論文「髻籠の話」が掲載されるのは大正四年四月の第三卷第二号で、この論文は同年五月の第三卷第三号に分割して掲載された。「髻籠の話」では、現在では広く学術用語として使われている「依代」「招代」という術語が提示され、これは質の高い優れた論文といえる。この論文は、柳田國男

の「柱松の話」とのプライオリティーが取り沙汰されているが、柳田が先だつて示した「神代」などの用語は一般化せず、折口の「依代」「招代」がまさることになる。折口は「髻籠の話」に続いて同年八月には「盆踊りと祭屋台と」、大正五年六月には「稲むらの陰にて」と、一連の論文を続けざまに発表し、大正五年九月には初の単行本である『国文口訳叢書 万葉集』上を出す。そして、同年十月には「三郷巷談」の続きを『郷土研究』第四卷第七号に発表し、十一月には国文学会で発表した「異郷意識の進展」が『アララギ』第九卷第十一号に掲載される。

やや煩雑に折口の年譜と論文をたどったが、実は「三郷巷談」の発表から「髻籠の話」に到る著述には、大きな問題が存在する。それは、「三郷巷談」は大阪の「三郷」における「巷談」、つまり口頭伝承としての世間話を、それぞれテーマをもたせて綴り、羅列的に並べたものといえる。折口の著作では、たとえば大正十年の「沖繩採訪手帖」や大正十二年の「沖繩採訪記」と同じような文体である。「三郷巷談」は、外形的な文体や筆致が、「髻籠の話」や「異郷意識の進展」と大きく異なっているのである。

「髻籠の話」では、「依代」をめぐる日本の基層文化がシステムティックにどうか、構造的に把握されているということが出来る。単純に神迎えに「依代」の必要性を説くだけでなく、この論文では「折口神学」とでも言える仮説が提示されているのである。そこには唯一絶対神への信仰が存在することを証明したいという、折口の思いを読みとることが出来る。折口は、

神迎えの髻籠は太陽を形象したもので、日本神話に登場するアマテラスに唯一絶対神信仰の神学形成を見出していこうとしている。⁴⁾

つまり、「髻籠の話」は折口神学的な内容をもちながらも、日本の基層文化にコミットメント出来ている論文で、ここで展開する論理は構造性をもちながら、持続的に検討されていく。これと「三郷巷談」とを比較すると、外形的には筆致に大きな差があるといわざるを得ない。この差をどう考えるかということである。

折口の著作を「三郷巷談」から「髻籠の話」、そして「異郷意識の進展」と読み進めていくと、「髻籠の話」や「異郷意識の進展」では、飛躍的に複雑な論理が登場してくる。このことをどう考えるかということでもある。もう一つ、折口学の研究、折口信夫に関する研究では、今まで「三郷巷談」はあまり取り上げられてこなかった。これはおそらく、「三郷巷談」をどう扱っているのか、文面からは折口自身の考えが十分読み取れないためではないかと思う。「三郷巷談」の背後に存在するものが見えにくく、概括的な評価は行われているが、知る限り細かな分析は行われてこなかったのではないかと思う。

「三郷巷談」の内容と主題

「三郷巷談」の内容を検討していくと、ここには折口が巷談か

ら描こうとした主題がいくつ浮かび上がってくる。折口にはこれ以外にいくつも重要な論文があり、あまり読まれてないと思われるので、便宜的に最初の巷談から番号をつけて検討していくと、まず初めに取り上げられている巷談が、①平野の御霊神社氏子の身体的特徴のことである。東区平野町の御霊神社というのは、現在の中央区淡路町の御霊神社で、本町駅と淀屋橋駅の間あたりの御堂筋から少し西に入ったところに祀られている。「御霊神社の氏子がかういふことを信じてゐる。ほかほかの社の氏子とかはつた処がからだに一個処ある。それはこの社の氏子に限つて玉莖が曲つてゐる、それで明らかに区別が立つといふのだ」で始まり、「御霊は蕃神だからその氏子が普通の日本人と違つた身体的特徴を有つてゐると考へるとおもしろい」という。蕃神だから異なつた身体的特徴を持つというのは折口の解釈で、これに続いてこの伝承の類例として、東区難波の八坂神社、堺市の天満宮、河内の道明寺天神の氏子をあげる。東区難波の八坂神社は現在の浪速区元町の八坂神社で、地下鉄大国町駅の近くに鎮座している。この神社の氏子の間にも玉莖が曲がっていると語り伝えられ、他社の氏子の「古老に聞くと、祇園の氏子は玉莖が曲つてゐるとはいはないで小水が曲つて出るといふのだといふ」と、聞き書きを行っていることもわかる。堺市の天満宮というのは、現在の旅籠町の天満宮で、「大阪の天満にはさういふことはない様であるが、或は年よりなんかのうちに御霊八坂同様信じてる者もあるかも知れない。尚多数の

人に問ふて見やうと思う。」という。河内の道明寺天神は、藤井寺市の道明寺天満宮のことで、文面のニュアンスとしては、これは河内に行つて聞いたというより大阪の町中で聞いたことと思われる。

①平野・御霊神社氏子の身体的特徴では、折口にとつては身近にある平野・御霊神社の氏子の身体伝承をもとに、類例を大阪市内と河内に求めているのである。この話では「身体的特徴」というのが重要だが、折口は「この伝説には大阪近辺では説明説話を伝えてゐる処はないが、或は地方によつては御存じの人があるかも知れない」といい、「説明説話」の表現からは口承文芸への視点がうかがえる。続いて「曲つてゐると称せられる氏子自身がいふので恥るといふより幾分誇つてゐる様な傾があるのがおもしろい」と、この伝承の心意を解釈している。この解釈は、自分たちの身体に関する、いわば異常な、マイナーな伝承をどう理解して伝えているのかということで、ここからは作物禁忌や食物禁忌、さらに後に折口も問題として取り上げ、坪井洋文が大きな問題に成長させた餅なし正月など、所謂タブー伝承の研究へと広がってくる。

また、ここでいうある神の氏子もっている身体的特徴については、その後、柳田國男も研究対象とする。柳田國男は、大正五年には『郷土研究』第四卷第八号に「一眼一足の怪」、同第四卷第九号に「片足神」、大正六年には第四卷第十一号に「片目の魚」、第四卷第十二号に「一つ目小僧」を書き、さらに同年八・

九月には東京日々新聞に「一つ目小僧の話」を連載する。「一つ目小僧の話」では、御霊信仰と氏子や贅の身体的特徴が論じられており、柳田のこの視点には、折口の「三郷巷談」からの示唆があつたとも考えられる。

①の平野・御霊神社に関する巷談がもつ要点は、蕃神、神と氏子との関係性における身体や身体的特徴ということになるかと思う。この後に続く「三郷巷談」を見ていくと、身体・身体的特徴に関する伝承がいくつも取り上げられている。折口信夫が抱いていた神観念は、長谷川政春の指摘を俟つまでもなく「身体」が重要な意味をもつが、それは「三郷巷談」で示されたこうした視点からの展開といえる。

折口はまれびと論でも神を論ずるときには、その神を具象性なものとして、つまり身体をもつものとして論ずるのが特色で、抽象的な神学として神を説明する視点とは異なっている。それは「まれびと」を神とするときに、「万葉集」の「人」の読みを重視するところにも、こうした視点が象徴的に表れている。折口の文化論には、唯物的な捉え方がしばしば見られ、同じような論理で神も人間の躰と強い結びつきをもって論じていくのである。まれびと論は八重山・石垣島でアンガマを見て、神と神の身体を意識したのではなく、折口の中にもつと根源的なところで、神を考えるとときに人間の身体と結びつける視点があつたといえる。

「三郷巷談」の次の巷談は②「ぼおた」で、柳田國男は、最

初の平野・御霊神社氏子の身体的特徴は『郷土研究』誌上で、「ぼおた」は『故郷七十年』で高い評価を与えている。「ぼおた」というのは掠奪婚のことで、具体的に年寄りたちの体験として「木津村・難波村・今宮村でも明治初年まで行われていた」として、「木津村では「今五十年輩の女のうちに」「あの人もおたで嫁やはったのにえらいええし（好い衆）になりやはったもんや」などといはれてゐる人も二人ばかりある。」と、地元の古老の語りをそのまま使つて記している。古老の言葉をそのままあげること、伝承の客観性を担保して「ぼおた」の巷談を示しているのである。そして「ぼおた」の最後のところでは、「ぼおた」は『うぼうた』の『う』が鼻母音の性格をもっていることから、それが略された」と、いわば言語学的な解釈をしている。

折口の言語学的解釈の当否は検討しなければならないが、「ぼおた」は家計不如意で嫁入支度の出来ない様な場合にするのだといふことは、この会話の断片によつても窺はれよう。「後になつては貧民の結婚の一形式となつてしまつたのだ」と、地元の伝承から「ぼおた」の社会性を捉えている。「ぼおた」でもう一つ重要なことは、これが明治初年まで行われていたと説明していることである。これが何を示しているのかといえ、生活の変化への関心ということである。

折口の著作を読んでいると気になる言葉遣いがいくつもある。折口の研究は、文学史の構築に主題があると思えるが、たとえ

ば「醇化」という言葉などで説明されていることがからは、折口は古代の姿を復元しようとしただけでなく、生活や考え方の変化に対して、非常に敏感に、注意深く捉えようとしているのが窺える。古代のことを固定的なモデルとして示すだけでなく、その後の歴史的变化を常に念頭におきつつ論じているのであり、この変化を「醇化」などの言葉を使いながら説明している。

このように折口著作を捉えると、「ぼおた」で言う「明治初年まで行われていて」「今五十年輩の女のうちに」という表現からは、掠奪婚の変化という視点が窺えよう。

次の③「えつたのこきわけ」からは、被差別集落の伝承が続いて出てくる。具体的には穢多のことが、穢多の尿の排泄が大阪でどのようにいわれていたのか、そして④「一里えつた風三里」の成句を出して、大阪の周辺、摂津や河内、和泉でその集落のあり方がどのようにいわれていたのかをいう。④の巷談では、「夙村の出入口には必ず門があった」、その門の存在が「昔は田舎に行つて夙村か良民の村を見かける唯一の標準だった」としている。さらに⑤「夙村の人間は肋骨が一本足らぬと伝えである」と、差別されている穢多・非人がもつ身体的欠損についての伝承を取り上げている。③から⑤の巷談は、穢多・非人が、当時どのように他の人たちにいわれているのかを伝承によつて示しているのである。

①では神と氏子との関係性における身体的特徴をいい、ここ

では夙村の人間の排泄や肋骨という身体的特徴を取り上げ、また、夙村落の外観、視覚的特色をいつている。折口には、前述したように唯物論的視点が有り、そのことが「夙村の出入口には必ず門があった」とか「昔は田舎に行つて夙村か良民の村かを見かける唯一の標準だった」ということを書かせているのである。

次は⑥「夙村の商売」で、ここでは「神戸では多つたの花売りがくる。大阪では多つたの出商売は下駄直し。花売りは夙とする。夙は狡猾だという。」伝承を記している。ここでは夙と穢多とが区別され、「行商人は多くは夙であるところから、夙ものは狡猾だといふうき名をとつたものと思はれる」という解釈を行い、夙・穢多の生業と気質の関わりを伝承の中で確認している。

⑦つ目は北河内郡の「出郷」の性格ということで、出郷は夙だという一方、「産所出郷ともよんでゐる」ことを取り上げ、普通なら「産所」は「散所」と解釈するところを、「産の穢を忌んで産婦の行つた所であるといふあたりから見ると、純然たる産所である」と判断している。伝承重視の姿勢がうかがえるのであるが、ここではもう一つ注目されることがある。それは「この付近ではこの出郷のことをまちといふ階級で、夙ではないといふ年よりがある」ということで、「まちといふ階級」という表現が出て来る。ここでいう「階級」は折口名彙とされている用語の一つである。折口術語では、「階級」は所謂ヒエラルヒーの

なかでの階級ではなく、生活様式を共通にする一つの集団というのを「何々階級」というのであり、「まちという階級」というのは、「まち」という性格をもつた場で生活をしている人たちの集団という意味である。⑦の中では具体的には「まちという階級」がどのような要件によつて成り立っているのかは説明していないが、「階級」という用語が「三郷巷談」の時点から、後の折口名彙と同じような意味で使われていると理解していいのではないかと思う。

⑧つ目は、「北河内辺りの夙村」で「わしらの村は宮さんすぢや」と誇っているのを屢耳にする」という巷談である。これは、夙は天皇の御陵番をしていた守戸であるという説に基づいて、二十年ほど前にある詐欺師が華族への取り上げを説いたことに拠るとしている。所謂世間話の生成を例示しているのであるが、夙と皇族とのつながりという巷談からは、折口の、社会的な人事に関する伝承への関心が窺えよう。

『郷土研究』第一巻第十号に掲載された「三郷巷談」最後の⑨では、被差別集落の衰退について具体的な地名をあげて例示している。豊能郡の産所は、「村はもう三十年も前になくなつたのでかなりの年輩の人でないと産所といふ村があつたことすら知らない」とか、このことは「附近の人に聞くと一軒減り二軒へりして何時の間にかすつかりなくなつた」など、⑨の記述からは豊能郡や北河内郡などの被差別集落を回っていることがうかがえる。ここでも「賤民の階級」という表現がある。この「階

級」の意味について折口が概念を規定するのは昭和六年一月の「民間伝承蒐集事項目安」(『民俗学』第三卷第一号)であるが、前述のように大正二年の段階でこれとほ近い考え方が出来ていたと推察できる。

「三郷巷談」の次の巷談は、大正三年三月の『郷土研究』第二卷第一号に掲載されたもので、この号には⑩「もおずしやうじん」と⑪「あはしま」の二項目が収められている。

⑩「もおずしやうじん」は、現在は堺市である泉北郡百舌鳥村百舌鳥が伝える精進の風習を取り上げたもので、万代八幡宮の伝承が長文にわたって記載されている。それは、万代八幡宮の氏子たちは、正月三日は肉食をしないで物忌みをするのと、何故肉食をしないで物忌みをするのかという伝承である。この精進を怠ると「かつたい(らい病)」になるといふ精進の起原説明、説明説話があげられ、さらに近年の徴兵制度によってこの精進習俗が衰退したことを説明している。

折口がこの伝承を取り上げたのは、らい病と肉食禁忌、万代八幡への誓いと村としての物忌みへの関心といえよう。「もおずしやうじん」の次の「あはしま」を合わせ考えるなら、折口の関心は穢れや物忌みであったと推測でき、しかも万代八幡の神への誓いは、神と氏子との関係性を示す伝承であり、最初の平野・御霊神社氏子の身体的特徴と通ずるものがある。

⑪「あはしま」は、淡島信仰の伝承を住吉明神との関係性のもとして取り上げ、さらに住吉大社の堺への巡行を紹介している

のであるが、注目されるのは住吉明神の妻である淡島神の白血長血の穢れ伝承を重視していることである。それは血の穢れによって流された淡島明神の伝承であり、流され神とその神自体が観念的なものではなく、人間臭さをもつことが示されている。堺の朝日神明社にも白血長血の伝承があり、朝日神明の神が流され、住吉明神の堺巡行に際しては、朝日神明の怨みを怖れていること、神明は嫉妬怨恨を表すために太鼓を打ち続けるという伝承をあげている。ここでも日本人の神観念が、①平野・御霊神社氏子の身体的特徴と同じように、観念的なものではなく人間の延長線上にあることを捉えているのである。また、穢れのために流される神については、加太での淡島祭祀の由来だけではなく、穢れを流すという、後に折口が説いていく常世論との関係もうかがえよう。

『郷土研究』第二卷第一号の「三郷巷談」はこの二つの巷談だけで、次は大正五年十月の『郷土研究』四卷七号に掲載された「三郷巷談」となる。ここではまず⑫「南ぬけの御名号」と題して「南無阿弥陀仏」の「南」が抜けるという名号を取り上げている。木津七軒の旧家の伝承と、この中の雲雀家が持つ名号についての説明であり、⑬は家の伝承についての巷談である。

次は⑭「算勘の名人」ということで、どこから来たかわからない漂泊者が持つ力についての巷談である。特別な力をもつ漂泊者としてソロバンの名人が出て来るが、これはいうまでもなく外界から訪れてくる特殊技能者の呪的な力についてのこと、

この人物は「何処からどうして来た人とも、今以て判然せぬ」が、その呪力によって傾いた唯泉寺の本堂が直るのを見ていたという人物が何人かいることをあげている。これは巷談の生成と伝承が、これを実見した人たちによって行われていくことの例示と捉えることができよう。

⑭「樽入れ棒はな」は、木津での祭りや婚礼に際して行う若者組の振る舞いについての民俗を報じたもので、若者組には「若中」とその上の「兄若い衆」があるという。ここで折口は「階級」という用語は使っていないが、「階級」についての具体例を捉えているのである。折口のいう「階級」には、年齢を基準にした階級、経験に基づく階級、さらに社会的地位に基づく階級の、三つがあるが、ここでは若者組という年齢に基づく階級ということ、先にも述べたように「階級」はこの時点で自身の中に概念化されていると推測できる。

⑮は「執念の鬼灯」で、ここでは「五大力恋緘」という歌舞伎狂言が出て来る。これは母から聞いた伝承としてあげている。折口は自らの母について多くを語っておらず、ここで母から聞いたことというのは、稀少な記載である。「曾根崎新地の菊野の殺された茶屋は、今年五十六になる私の母が、子供の頃まで残って居たさうだ」といつていたとか、曾祖母からの口移しの話を「母が其まま、私等に聞かせた。子供の時分は、北の新地へさへ行けば、何時でも、菊野のかたみの鬼灯が見られるものと信じて居た」という。

「五大力恋緘」の「五大力」は、たとえば住吉大社境内に祀られていて、玉垣の中に小石がいっぱい敷かれ、「五」「大」「力」と墨書された小石を拾ってお守り袋に入れてお守りとする。⑮では五大力菩薩の信仰についての伝承をあげているわけではないが、五大力菩薩信仰については、「郷土研究」では、「三郷巷談」掲載以前の第一巻第五号に南方熊楠が「五大力菩薩」を書き、また同じ巻号に出口米吉が「五大力のカンザシの形」を書いていて、誌上を賑わしたテーマである。

こうした伏線があったとも考えられるが、ここでの主題は「五大力恋緘」に関する巷談である。「五大力恋緘」は、元文二年（一七三七）に曾根崎で薩摩侍・早田八右衛門が痴情によって湯女菊野ら五人を殺害した事件に基づいた歌舞伎世話物の戯作で、寛政六年（一七九四）に初演されている。ここでの巷談は、実際にあった殺害事件と歌舞伎とが相俟って、演劇伝承として大阪の町々に流布されていたと考えられ、これが折口の曾祖母から母へと伝えられていたのである。

折口は大正七年十月には『土俗と伝説』第一巻第三号に「権久」という短文を書いているが、これは折口が御堂に祖母とお参りに行ったときに教えられた巷談で、その成り立ちを「伊勢の瓢箪かしく」の語りが三郷の町に広がり、芸能化していったことを推測している。「権久」は浄瑠璃や長唄などにもなっていて、やはりこうした芸能と巷談とが結びついていたといえよう。

歌舞伎の「五大力恋緘」はおそらく曾祖母も母も観ており、

これが女系の家の話題として話され続け、折口は子どもの頃に聞かされていたのをここに記したと考えられる。いずれにしても「五大力恋緘」は、その実地の事件現場と結びついた演劇伝承として庶民の間に広まっていたことの表れが⑤の巷談といえる。「五大力恋緘」にしても、「椀久」にしても、いわば文芸化することで、巷の話、世間話としての伝承が形成されたと捉えることができる。

⑥「六部殺し」も同様に演劇世界が巷談として流布したものを初めにあげている。「熊野八鬼山の順礼殺し」は、文化十二年（二八一五）に中座で初演された「敵討浦朝霞（かたきうちうらあさがすみ）」の「紀州八鬼山峠の場」が前提となっている。大阪では明治年間まではしばしば上演された戯作で、「三郷巷談」が掲載された時代には、「熊野八鬼山の順礼殺しのからくり唄」といえば、どのような内容であるのか十分に通用したのである。この当時と現在とは歌舞伎に対する社会的な関心度が違っているため、現在では「熊野八鬼山の順礼殺しのからくり唄」といわれても内容が即座に理解できないのである。

「五大力恋緘」「熊野八鬼山の順礼殺し」とも、歌舞伎として演じられたことが巷で再生産されて世間話として語り継がれるという構図をもつのである。これと同様な説話の構図が、中世末から盛んに描かれるようになる絵馬にも見られる。義経と弁慶など、さまざまな武将図が絵馬堂に掲げられることによって、説話が再生産されていくという構図であり、こうした武将図は

昭和初期まで社寺への奉納が続いていた。つまり、演劇や絵画などによる文芸が巷談・口承文芸として再生産されていくというシステムが、ここには存在しているのである。⁸⁾

折口は、子ども心に八鬼山の順礼殺しの演劇には「云ひ知らぬ恐怖を唆られた」といい、同じような六部殺しが大阪の町中にもあるのだということ教え子から教えられ、こうした伝承が大阪の町中にあることから、大阪のもつ「田園都市の匂ひ」を感じずには居られないとしている。ここでは折口がいう「田園都市」とはどのような意味なのか、柳田國男の場合と同じと考えていいのかも問題となろう。柳田の「田園都市」は都鄙連続論で、近代における都市論の中では都市と田舎を結びつけ、そこに連続性をもたせて論じるところに特色があるが、折口の場合はどうなのかということで、折口の都市論が今後の課題となる。

『郷土研究』の最後が⑦「日向の炭焼き」で、ここでは日向の炭船が難波の土橋に着いた後には、行方知れずになる子どもが必ずいて、この船でさらわれていくという巷談があったことを報じている。町の中には日向という外界との接点があつて、ここで炭船によってチャンネルが開かれると子どもがいなくなるという、いわゆる神隠しの、都市版といえる話である。

『郷土研究』が休刊された後、折口は民間伝承研究の雑誌として大正七年八月に『土俗と伝説』を創刊する。そして、その創刊号から膝折武助のペンネームで「三郷巷談」を続ける。その

最初の話が⑱「しゃかどん」で、大阪府三島郡佐位寺の、ある一族の伝承を記している。佐位寺というのは、折口にとって特別な意味をもった所である。これについては折口も書いていないので触れないが、ここではある一族がもつ身体的な特徴を紹介している。身体的特徴については、すでに①で氏神との関係で氏子が身体的特徴を持つ巷談をあげ、③⑤でも身体的特徴に関する巷談をあげている。そして、ここでも一族がもつ皮膚の色の特徴をあげているのであり、折口の身体へのこだわりをここにも見ることができるといえる。身体的特徴は、前述のようにその異常性に注目されるが、折口は⑱でも、その一族は、かつては大地主であったことを匂わしており、一族の優位性が他とは異なる身体的特徴となつて表れる例としてこれをあげている。

⑲は夙村のことで、集落の周りに「へ」の字形の濠のような池があることをあげ、⑳では「ゆうべ」として、「ゆんべ」という言葉を冒頭にすえた歌を二例紹介している。ここでは『郷土研究』に掲載された川村杏樹（柳田國男）の「西行橋」、南方熊楠の「紀州俗伝」との類似を言っており、二例の歌とも末がわからなくなっているが、これは「可なりな老人に聞いても知らぬ」と、自らの採訪資料であることを明示している。

㉑の「うしはきは」は、馬捨て場の伝承で、穢多、皮、肉のことをいい、この場所は「わりあひに神聖な処と考へられてゐる様である」と解釈している。

「三郷巷談」の最後の記事は、大正七年十月の『土俗と伝説』

第一卷第三号で、ここでは「名字」、「人なぶり」、「十年此方時々、子ども謡ふのを聞く」（『古代研究』民俗学篇二では「らつばを羨む子ども」という題がつけられている）の三つの巷談が取り上げられている。㉒「名字」は、木津や難波の名字を取り上げてその由来伝承をあげている。㉓「人なぶり」は人なぶるさまざまな成句、名がしらの音をアリティションして遊ぶような成句など、言語伝承を取り上げている。最後の㉔では、十年ほど前から子どもたちの間に流行っている歌を取り上げ、この歌は「廿年前に子どもであつた、我々の知らぬ軍人羨望或は、崇拜である」と解釈している。自己体験に基づく二十年前と、十年前からを比較しているのがあり、軍事化の進行という変化のなかで、子どもたちが新たな歌を生成し、これが広まっていることを明らかにしている。歌は「へいたいさん。ちんぼと喇叭と替へてんか」というもので、これを喇叭への羨望あるいは崇拜と見ているのである。

「三郷巷談」の意図と現在の可能性

長くなったが以上が「三郷巷談」の全容で、全部で二十四の話からなっている。それぞれの巷談の要点は前項で述べたので、これを集積すると「三郷巷談」では、身体や夙・穢多という下層民の話が多く取り上げられ、さらに穢れとか物忌みに関する話が複数ある。これは折口なりに何らかの意味があると考えて

いかなければならないが、「三郷巷談」は後述するように自撰年譜では「採訪記」としており、中には自家の伝承や自己体験に基づくものがあるものの、これらは大阪で実地に見聞した伝承であるということが出来る。

題名が「三郷巷談」で、これからすれば「三郷」の「巷談」を綴ったもので、基本的には三郷の町なかで聞いたことから、巷で話されていることがらをまとめたとして理解できよう。ここでは「三郷」がどこであるのかという問題があるが、これを「大坂三郷」とするならば、収録された巷談は大阪の都市における巷談、都市の世間話ということになる。

結果的に「三郷巷談」として括られている話数は二十四話で、柳田國男の『遠野物語』に比べると少ないが、「三郷巷談」の成立と柳田國男「であげた、折口の『遠野物語』との出会い」とこの本を手に入れたときの折口の感動、そして巷談をいわば羅列的とも思えるように配列する構成方法から考えるならば、折口は「三郷巷談」を民俗学への入りとして、『遠野物語』を強く意識して執筆したといえよう。

ただし、「三郷巷談」に見ることが出来る折口の視点は、『遠野物語』とは異質なもので、ここに折口独自の伝承世界の捉え方があると考えられる。『遠野物語』は、遠野盆地に立地する山間の町というよりも、その周辺の農山村で伝承されている山人、山の神など、原日本人に関する伝承を照射するように書かれたといえるが、「三郷巷談」は都市社会がもっている現

実の、折口の言葉でいうなら「社会人事」、大阪という都市社会がもっている社会人事に関する伝承をここで表現しようとしたといえる。

これについては後で論ずるが、折口は「三郷巷談」を書くときには、すでに『遠野物語』を読んでおり、柳田に倣って文体を真似ながら、いわば民俗学への習作としてこれを書いたのではないかと思われる。しかし、大阪びととしての折口は、「三郷巷談」の視点として、身体や差別、さらに百舌鳥の「もおずしやうじん」や「あはしま」などにあるような穢れや物忌みを中核に据えて、都市社会がもっている民俗的世界を描いていたのである。折口の民俗学への入りをここに定めるならば、いうまでもなく折口は、柳田とは異質な民俗の捉え方をしながら民俗学への途を歩み始めたといえよう。

折口信夫の「三郷巷談」がもつ、現在の可能性については、もう少し一つ一つの話を分析し、さらに大阪のなかでこれらを確認してみなければならぬ。ただし、所謂農村に基盤をおいた民俗学が、現在ではすでに限界性をもっているならば、もう一度見直すべきことの一つは、「三郷巷談」に示されているような、都市社会の口頭伝承がどのように展開しているのかということになろう。こうした問い直しは、現在の口承文芸研究のなかに如実に表れているが、その萌芽や視点は、すでに折口信夫の「三郷巷談」に存在していると主張できる。「三郷巷談」が持っている現在の可能性はここにあるといえる。

そして、さらにこうした問い直しは、研究の対象となる話や伝承という行為などの外径的問題というより、むしろ口承文芸研究の目的は何かという内径の問題に対して必要なものでなからうか。現在、口承文芸研究の目的については混迷状態にあり、確定しづらいのが現実で、そのことが一方に伝承の危機を意識させているのだろうと思う。

ここで折口の「三郷巷談」を持ち出すなら、これは大阪という町の社会人事を巷談として拾ってきたのであり、いわゆる口頭伝承をもとにした社会史の再構築が、都市社会において可能なのだということを教えてくれているのではなからうか。「三郷巷談」に現在の可能性が認められるなら、むしろそれは、具体的にはここにあらう。

町なかの伝承を羅列的にならべたにすぎないと思われる「三郷巷談」を、積極的に評価するなら、それは、都市における社会史の再構築において、口頭伝承・口承文芸がどのような役割を果たすことができるのかという、問い直しがここからできることである。ここではいうまでもなく巷談の文芸性も問題にされなければならないが、折口の提示は決して小さくないと思う。

「三郷巷談」を私なりに位置づけると以上のようになるが、「三郷巷談」の評価ということでは、これが『郷土研究』第一巻第十号に掲載されると、その次の号に柳田國男は、赤松某の名で「氏子の特徴」という短文を寄せる。そして、この中で「第十号の三郷巷談の中に、大阪平野町御霊神社の氏子、男の徴の尖が

曲つて居る、其理由は不明云々。此は冗談で無く面白い話である。自分は今までに此例を二つ三つ聞いて居るのみならず、打明けた処が自身亦其特徴ある氏子の一人である。」という。さらに最後の方で「唯土俗学上の問題として永く我々に残るのは、何故に神の石が斯な隠し処に中つたのか（イ）、氏神の傷が何故に末々の氏子にまで影響を与へたのか（ロ）、以上の二点である。折口さんのやうな注意深い人生の観察者で無ければ、いつ迄も此疑を解き得る人はあるまいと思ふ。」と評価する。柳田は、あの変哲もないというか、町の伝承を書いた「三郷巷談」から、これだけの評価をしており、なみなみならぬ眼力の持ち主ということができよう。

そして、最晩年の『故郷七十年』⁽⁹⁾で「嫁盗み」を取り上げ、折口が「三郷巷談」に書いた「ぼおた」を高く評価している。折口の「ぼおた」は単なる伝承報告のように見えるが、「ぼおた」が行われている理由を家の経済性に求めており、このことを高く評価する。柳田は『故郷七十年』で、「折口君の報告はたしかこんな話であつた。大阪の木津・難波・今宮の三郷では明治の初年ごろまで『ぼおた』といふ嫁入りの風習があつた。（中略）私はこの報告を読んでハッと思ひ、大変学問が進んだやうな気がしたので折口君に御礼をいつたものであつたが、ボオタは奪うたといふことなのである。」という。

柳田は「三郷巷談」をこのように評価するが、ここでまた問題となるのは、柳田國男は『故郷七十年』で「大阪の木津・難

波・今宮の三郷」といつていることである。「三郷巷談」の「三郷」がどこなのか、折口自身は全く説明していない。柳田國男は前述のように「木津・難波・今宮の三郷」といい、池田弥三郎は『私説折口信夫』⁽¹⁰⁾の「しのぶかのおか」で、「雑誌『郷土研究』の編集者の一人、柳田國男は「大阪東区、折口信夫」と署名した、未知の人物から「三郷巷談」という原稿を受け取った。一読して柳田は驚嘆した。三郷は「灘三郷」のサンゴウであらう。いわば生粋の大阪というべき地域であって、その原稿の内容は、大阪の町住みの生活における民俗の報告であった。しかもそれは単なる町住みの生活の、無差別な記録ではなくて、その生活における、クラシツクな残存というべきことがらを、『郷土研究』の忠実な読者としての立場から選択し、しかも要所要所は、方言をもつて正確に記述していた」という。池田弥三郎がいう「三郷巷談」の位置づけには、にわかには賛成しかねるが、池田は「三郷」は「灘三郷」といい、「三郷」の捉え方は確定していない。

「三郷巷談」の巷談として記された場所がどこなのかを見ていくと、圧倒的に木津、難波が多い。大阪ということで全体を覆っていることもあるが、この他に今宮、中央区淡路町、北区、住吉区长居、西成区玉出・津守、池田市、吹田市、神戸市、堺市、藤井寺市、寝屋川市、守口市が伝承の舞台として登場してくる。こう見てくると、「三郷」は柳田がいうように木津・難波・今宮とも考えられるが、木津・難波から西成区玉出・津守までの舞

台は、所謂「大坂三郷」である北組、南組、天満組のやや拡大版であり、折口がいう三郷は所謂「大坂三郷」といえよう。そして、この大坂三郷から摂津・河内・和泉の三国を取り上げ、この巷談報告は途中で終わっているのではないかというのが、現時点での判断である。しかし、三郷からの三国は、万遍なく取り上げているのではなく、摂津と河内のことは結構出てくるが、和泉のことは少ない。こうした偏りはあるものの、「三郷巷談」は「三郷」と「三国」を掛けて、そこから都市伝承の構造化を見ようという目論見が折口にはあったのではなからうかと思う。

最後に、折口信夫が何故「三郷巷談」で差別、身体、穢れに目を向けたのか。これらに主題があることは確かで、これらを何故主題としたのかを検討しておきたい。この問いは折口の学問全体を覆う課題でもあり、答えるのは容易ではないが、現時点では、やはりこれには折口の生まれ育った環境が深く関わっていると考えざるを得ない。

「自撰年譜」⁽¹¹⁾で見えていくと、折口は明治二十九年の条に「大阪市南区竹屋町、育英高等小学校に区外生として入学。通学の道程一里。途中、千日前・道頓堀及び、所謂南地五花街を經る」と書いている。さらに折口は別のところで「私は町外れの家から、『島の内』の高等小学校へ通うて居た。一里からもある通学距離を、出来るだけ時間をかけて楽しんで往き返した」⁽¹²⁾という。

折口は、所謂「南」の繁華街を経て育英高等小学校（大阪市立第一育英高等小学校）に通学したのであり、中村浩は「若き折口信夫」のなかで、こうした記載から折口は、高等小学校への通学には「芝居や狭斜の巷の景物をさぐる楽しみを、多分に内包していたのであろう」といい、さらに「学校の帰りに、よく万治郎宅に立ち寄った信夫は、右団次の家の前を通ることも言い知れぬ喜びを抱いたことであろう。中座の舞台で顔馴染みになっている座頭役者であり、当時大阪役者の最高位にあつた右団次なれば、なおさらであつたろう」と推測している。¹³

「南地五花街」というのは、宗右衛門町、九郎右衛門町、槽町、坂町、難波新地のことであり、折口は高等小学校へ通うのにこうした所を通つた。また、折口は十歳になる前から道頓堀の五座の劇場に出入りし、歌舞伎や俄に接し、演劇世界に対する人並みならない関心があつた。折口への歌舞伎への関心は、東京へ来てから集めた歌舞伎絵葉書やプロマイドからうかがえる。現在残されている折口の歌舞伎絵葉書などのコレクションは二五四七点にのほつており、その蒐集については、長く折口と居をともした鈴木金太郎が触れている。¹⁴折口が集めた歌舞伎絵葉書の中では市村羽左衛門のものが最も多く一七〇点余があり、先の右団次の絵葉書は十四点が確認されている。「三郷巷談」に出て来る「五大力恋緘二熊野八鬼山の順礼殺し」については前述したが、こうした演劇伝承への関心は、子どもの頃からの体験がもたっているといえる。

「自撰年譜」にある次の明治三十二年には、天王寺中学校への入学のことがあり、入学の口頭試問を三矢重松から受け、その通学には「通学距離二十町余。道、江戸時代以来の貧窮街長町裏・家隆塚と伝へる夕陽ヶ丘・勝曼院・巫子町を通る」と記している。通学路のことをさりげなく書いているが、この記載はかなり重要な意味をもつといえる。とくに「江戸時代以来の貧窮街長町裏」は、スラム街としてよく知られたところで、ここを通つて中学校に通つていたのである。長町裏は、南区日本橋筋の町々、名護町などで、近世大坂では非人集落であつた天王寺垣内、鳶田垣内、道頓堀垣内、天満垣内の四ヶ所垣内が、後に拡大した町である。

折口の通学路にあたる合邦が辻辺りは、近世期には西国の巡礼者や乞食非人たちが野宿をしたところとしてよく知られ、後には周辺に長屋が建てられて貧窮集落が生まれる。長町裏は、明治二十四年には名護町の撤去命令が出て、長屋街は解体され、立ち退きにあつた人たちが難波や天王寺、北平野、木津、今宮などに移り、新たな貧窮街が形成されていくのである。この撤去命令で難波には一九〇五戸、天王寺・北平野に一二二六戸、木津・今宮には八七四戸が移転している。¹⁶こうして新名護町がうまれ、スラム街が拡大するが、折口はこういう中で生活していた。折口家自体は貸家をもつほど裕福な家であつたが、折口の日常生活には身近に貧しい暮らしをする人びとの姿があつた。幼少の子どもの頃から歌舞伎を見たり、歌舞伎役者が身近に

いたり、大阪南の花街を通過して高等小学校に通ったり、スラム街を経て中学校に通ったりなど、こうした折口の少年期の体験が、どこへつながっているのかといえ、それは『古代研究』の「追ひ書き」にある「新しい国学は、古代信仰から派生した、社会人事の研究から、出直さねばならなかつた事を悟つた」という中の、とくに「社会人事の研究」につながっているのではないかと思う。折口の文学研究は、文学そのものというより、むしろ文学に関する社会人事的研究に力点があると言つたほうがふさわしく、何故社会人事の研究が必要なのかというところに、折口の問題関心が現れているといえよう。

折口の「自撰年譜」(二)の大正二年には、「三月、柳田先生により、『郷土研究』創刊。『三郷巷談』——探訪記——を投稿」⁽¹⁷⁾と、わざわざ「三郷巷談」に「探訪記」という注記を付けている。自ら探訪記と入れていることは、民俗学への出発を年譜で宣言していると理解でき、早い段階に柳田の教えを守つて、フィールドワークの大事さを主張している。

その探訪をする時に何を見ていくのかといったときに「三郷巷談」に示されているのが、差別、身体、穢れである。そして、こうした問題設定は、前述したような多情多感な高等小学生や中学生のときの社会に対する思い、大阪びととしての折口の感性にあると思える。國學院大學経済学部の木下順の「折口少年の通学路」は折口論のなかでは出色の出来で、経済学的な視点でとくに長町裏に注目し、ここから折口の学問や文学形成の土

壌が論じられている。木下はこの論文のなかで、折口の学問的な原点は、「外にあつては日本における社会問題の原点たる長町裏を彷徨しつ『野性を深く遺伝してゐる大阪人』に『問い寄つた』経験と、内にあつては『彦次郎さん』や自らの内に脈々と流れる『軟弱な上方気質』を自覚する過程にあつたのではないだろうか」と指摘している。日本でも有数のスラム街の一つである長町裏に存在する社会問題を自分の中に抱えつつ、一方ではまた「追ひ書き」の中で書いている身内の彦次郎さんに思いをよせる心情、これら二つが相まって折口の研究視点が育て上げられたのではないかというのである。⁽¹⁸⁾「三郷巷談」の視点もこうして醸成されたといふことができる。

おわりに

「三郷巷談」は、一見すると町の巷談を羅列したような文体だが、それぞれの巷談には後々のまればと論などの神観念論に結びつくような視点、「ころつきの話」など芸能史論の根底にある差別や穢れへの視点、あるいは階級という視点などがうかがえる。この意味においては、「三郷巷談」には後に学問的に成熟し、構造化されていく日本文化への視点や着想が、いくつも未成熟なかたちで鏤められていると見ることが出来る。そして、「三郷巷談」そのものは、都市の社会史の再構築における口頭伝承・口承文芸の役割を示唆してくれており、新たな口承文芸研究を

拓いていく萌芽があるといえよう。

口頭伝承や口承文芸による都市の社会史の再構築というのは、ここであげるまでもなく近世の江戸や上方などでは、随筆類に夥しい巷談が収められている。やや性格は異なるが、巷談的な話も近世以前の、たとえば『看聞日記』には京都の出来事が伝聞などをもとにして記されている。こうした各時代の巷談は時代性をもちながら、一方では各時代を徹底する話題として表れているはずで、記録類も使いながら巷談による世相史の構築ができるのではなかろうか。明治期に発行された錦絵新聞、さらにその後の新聞等など、現在、聞き書きで知り得る以前の巷談も収集が可能である。折口信夫が「三郷巷談」で示した巷談群は、現在ではどうなっているのだろうか。時代の推移のなかで、何が世間話としての巷談の題材になっているのか、折口の「三郷巷談」を読んでいると時代のなかで忘却され、一方では生成される巷談があることを思わせてくれる。口頭伝承や口承文芸による都市の社会史の再構築というのは、ここから発想したものである。

注

(1) 折口家は、生薬・雑貨を商う家であったが、信夫の祖父造酒ノ介の代から医業も行うようになり、造酒ノ介は被差別集落の者も分け隔てなく診療し、被差別集落からの信頼も篤かったという。「三郷巷談」の発表とほぼ同じ頃の大正三年三月に『不二新聞』に連載していた自伝風の

小説「口ぶえ」(『折口信夫全集』27所収)には、祖父の診療の姿が描かれている。そこには「十八年の夏、これら病が流行した。医者であつた祖父は土地の人々のために、夜の目も寝ないで奔走してゐた。……今度は自身で死ななければならぬ病にとりつかれた。つつしみ深かつた人が、被せても被せても蒲団を脱いでのたうつて苦しんだ。祖父の死んだことが聞えると、近く、穢多村から、ぞろぞろと軒さきへ来てわあわあ泣いた。『先生さんが死にやはつたら、わしら見たいな者は、これから病気になるつても誰も見てくれる人はない。』と大声あげて哭いた者もあつたさうである。」とある。事実を伝えると思われるこの叙述からは、信夫にとつても被差別集落の人たちは、決して差別する対象ではなかつたはずである。

なお、『折口信夫全集』17には「三郷巷談」初回発表の一部(御霊神社氏子の身体的特徴、ぼおたの二項目)が収録されている。

(2) 昭和二十二年十月「先生の学問」(『折口信夫全集』19)には、「先生が、この学問の方向へ志を向けられたのは、明治四十年代の『後狩詞記』『石神問答』『遠野物語』で、一人の経歴で言へば、私が専門学校を出る頃です。学校を終る頃になつて私どもは初めてこれらの暗示に富んだ、其であつて、まだ暗示の具体化せられきつてゐなかつた當時の学風にふれたのです。だから言ひ表す方法はわかり

ませんでしたのは事実です。が、ともかく何か私どもの待ち望んでゐた学問に行きあつたといふ気が強く心に来ました。国文学でも史学でもないが、まるきり違つてゐるものでもない、かう言ふ学問が、はじめて我々の前に現れて来た。其は、明らかに、大きな驚きでした。何しろ文科系統の学問に大きな改革が起る前ぶれだつたのですもの。……『後狩詞記』は、雑誌の附録として出た為に知つた時はもう手に入らず、『石神問答』『遠野物語』は手に入れることは出来ませんでした。(二二〇・二二一頁)と記している。

- (3) 『折口信夫全集』26、「遠野物語」は『古代感愛集』所収
(4) 「髯籠の話」に見ることができる「折口神学」については、拙稿「神去来観念と依代論の再検討」(拙編『折口信夫・釋道空―その人と学問―』所収、平成十七年四月、おうふう)を参照願いたい。

- (5) 長谷川政春「折口信夫の神―その身体性の意味」『東横国文学』第十五号、昭和五十八年三月

- (6) たとえば「ほかひびと」というのは、「ほかひ(行器)」を持つて歩くことからの命名で、持ち歩く容器の「ほかひ」は祀る神が籠もるためのものである、というような捉え方に表れている。こうしたモノから論理を組み立てていく思考法は随所に見ることができる。

- (7) 「階級」については、昭和六年一月の「民間伝承蒐集事項

目安」(『民俗学』第三卷第一号)で概要が示され、さらに昭和九年五月の「民俗学」(『日本文学大辞典』新潮社)で説かれている。

- (8) 折口は家の中の演劇に関する巷談(世間話)について、芝翫の芸をとりあげて「彼は、遠く咲く白蘭花のやうな運命を見たであらう。其が、やや風いだ気味合ひにおちついたのが、二十三年十月の『谷間の姫百合』である。若い有洲伯爵に扮した彼の印象は、其後長く大阪の町びとの心を去らなかつた。私などは、其頃四つになつて居たばかりだが、十代になつても、家族や、親類の女たちが、此成人の記憶を語るのを聞いて、育つたものである。其だけに、舞台よりも、生活の上に、此白蘭の花を幻想する人と、我当のなつて居たことが思われる。」(『憂々たり 車上の優人』昭和二十一年九月、『日本演劇』第四卷第八号、『かぶき譚』所収『折口信夫全集』22、一七一頁)という体験を語っている。演劇世界が市井で話題となり、けられたことがわかる。

絵馬による説話の再生産については、拙稿「絵馬研究の課題」(『技と形と心の伝承文化』慶友社、平成十四年三月)を参照願いたい。

- (9) 柳田國男『故郷七十年』昭和三十四年十一月(『定本柳田國男集』別卷三所収)に「嫁盗み」の項がある。

(10) 池田弥三郎『私説折口信夫』昭和四十七年八月、中公新書

(11) 『自撰年譜』は、現代短歌全集第十三巻『古泉千樫・釋道空・石原淳集』（改造社、昭和五年九月）に「年譜」として附されたもので、『折口信夫全集』36に収録されている。

(12) 「憂々たり 車上の優人」（昭和二十一年九月『日本演劇』第四巻第八号、「かぶき讚」所収）『折口信夫全集』22、一六一頁

(13) 中村浩『若き折口信夫』（中央公論社、昭和四十七年一月）六〇頁

(14) 國學院大學日本文化研究所共同プロジェクト『折口信夫歌舞伎絵葉書コレクション』國學院大學日本文化研究所、平成十九年一月

(15) 鈴木金太郎「先生の戯曲のことなど」（昭和三十年六月、『折口信夫回想』中央公論社、昭和四十三年十一月）で、「芝居の絵はがきも随分集められた。銀座尾張町を少し北へ行った東側に絵はがき屋があって、銀座に出れば、必這入って、何枚か買はれる。劇場内でも、幕間にはきつと売店へ漁りにゆかれる。当月興行のものだけでなく、どんな古いものでも、好い写真、変った役のものなどがあると、どんどん買はれた。寧ろ、古い珍しいものを見つめる方に、熱を持ってゐられたやうだ。たしか、お厩橋あたりの写真屋で、源之助の古い写真を持ってゐるのを

探し出し、五、六枚買って来て、おほ自慢をしてゐられた。『かぶき讚』の口絵の源之助の写真は、其時のものである」と思い出を記している。こうして集められた歌舞伎絵葉書などが二五〇〇点を超えたのである。

(16) 加藤政洋「大阪最初のスラムクリアランスとその帰結——「木賃宿的長屋」地区の形成をめぐって——」『立命館大学人文科学研究所紀要』八十三号

(17) 『自撰年譜』（二）は、短歌文学全集『釋道空』（第一書房、昭和十二年一月）に「釋道空年譜」として附されたもので、『折口信夫全集』36に収録されている。

(18) 木下順「折口少年の通学路——大阪日本橋・「長町裏」からの問題提起——」『折口博士記念古代研究所紀要』第八輯、平成十七年三月。その後、木下は、「折口少年の風景——社会問題を歩く——」（『國學院經濟學』第五十六巻第三・四号合併号、平成二十年十一月）を執筆している。

付記 本稿は、平成二十年六月七日に開催された日本口承文芸学会第三十二回大会の公開講演「折口信夫『三郷巷談』の意趣」をもとに執筆したものである。

（おがわ・なおゆき／國學院大學）